

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：34603

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00978

研究課題名（和文）古墳時代における装飾付大刀の流通と氏族制に関する研究

研究課題名（英文）Research on the distribution of decorated swords and the clan system in the Kofun period

研究代表者

豊島 直博 (Toyoshima, Naohiro)

奈良大学・文学部・教授

研究者番号：90304287

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：金や銀で飾られた装飾付大刀は、古墳時代の生産と流通、軍事や政治体制を復元するのに有効な遺物である。本研究では、装飾付大刀のうち、圭頭大刀と円頭大刀を中心に研究を進めた。まず発掘調査報告書で遺存状態の良好な資料を抽出し、資料を保管する機関に赴いて実測図の作成と写真撮影を行った。つぎに、大刀の分類と編年を再構築し、時期別の分布図を作成し、生産と流通の復元を行った。さらに、朝鮮半島の出土例と比較し、圭頭大刀と円頭大刀の系譜、国産化の開始時期、生産主体について考察した。圭頭大刀は百済に系譜をもち、6世紀後葉から7世紀中頃まで生産される。その生産と配布は上宮王家の活動を反映すると結論づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、圭頭大刀と円頭大刀の実測図作成と写真撮影を広く行い、現時点での詳細な情報を記録することができた。古墳から出土する装飾付大刀は脆弱で、未修理の遺物も多く、詳細な観察記録は今後の保存と修理に欠かせない情報である。

本研究によって、新たな圭頭大刀の分類と編年を構築できた。本研究では圭頭大刀の製作技法に着目した分類を展開しており、同様な視点は他の装飾付大刀の検討にも有効であると考えられる。また、圭頭大刀の生産と流通に上宮王家が関与することを論証した。圭頭大刀を副葬する古墳には冠や馬具も副葬されている。今後、それらの遺物からも氏族制との関わりが指摘できると期待される。

研究成果の概要（英文）：Decorated swords are useful relics for reconstructing the production and distribution, as well as the military and political systems, of the Kofun period. In this study, we focused on the Keitou and Entou swords, among the decorated swords. First, we extracted materials in good condition from the excavation survey reports, and visited the area during the period in which the materials were stored to create actual measurement maps and photograph them. Next, we reconstructed the classification and chronology of the swords, created distribution maps by period, and reconstructed their production and distribution. Furthermore, we compared them with excavated examples from the Korean Peninsula and considered the genealogy of Keitou and Entou swords, the start of domestic production. Keitou swords have a lineage in Baekje, and were produced from the late 6th century to the mid-7th century. We concluded that their production and distribution reflect the activities of the Jyougu royal family.

研究分野：考古学

キーワード：装飾付大刀 古墳時代 圭頭大刀 円頭大刀 上宮王家

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本の後期古墳からは、金や銀で表面を飾る装飾付大刀がしばしば出土する。それらは把頭の形によって単龍環頭大刀、双龍環頭大刀、獅噛環頭大刀、頭椎大刀、圭頭大刀、円頭大刀などに大別され、器種ごとに分類と編年が行われてきた。

多様な装飾付大刀が併存する理由として、畿内の有力豪族が個別に生産と流通に関与したという説がある。例えば、双龍環頭大刀は蘇我氏、頭椎大刀は物部氏と関係が深いという見解がある。また、装飾付大刀は7世紀初頭に一斉に消滅し、方頭大刀に統一される。その背景には、推古朝に官位制が導入され、大刀による身分表示が廃止されたという意見がある。このように、装飾付大刀は日本の古代国家形成を解明するうえで重要な遺物である。

以上の現状をふまえ、本研究では装飾付大刀はいつ消滅したか、装飾付大刀の多様性は氏族制を反映するか否か、装飾付大刀は日本の古代国家形成にいかなる役割を果たしたか、を研究の背景ととらえ、研究を進めた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、装飾付大刀の生産と流通の実態を解明し、日本の古代国家形成論を発展させることである。古墳時代を初期国家段階とみる「前方後円墳体制論」は、国家の必要条件として軍事組織の発達や、鉄をはじめとする必需物資流通の掌握を挙げている。本研究で扱う装飾付大刀は軍事に関わる武器であると同時に、必需物資である鉄と貴金属の産物である。ゆえに、その生産と流通の実態を解明すれば、前方後円墳体制論の妥当性を検証できる。

また、従来の国家形成論を発展させるには、律令制の完成をもって国家の成立とみなす伝統的な国家論も視野に入れ、「初期国家」から「国家」への変化を検討する視点が有効である。私は、双龍環頭大刀と頭椎大刀の生産に蘇我氏と物部氏が関わったことを指摘した。いっぽう、装飾付大刀の消滅後に現れる方頭大刀が飛鳥の官営工房で生産され、国家の軍事政策に基づいて東日本に流通したと主張した。つまり、7世紀後半には豪族による武器生産が衰退し、国家主導の生産に転換する。さらに他の装飾付大刀の分析を加えれば、豪族による武器生産が淘汰され、国家による生産体制が完成する過程が解明でき、武器の生産と流通から国家形成を見直す展望が開ける。

3. 研究の方法

本研究では、まず先行研究や発掘調査報告書をもとに資料を集成する。つぎに、未発表資料や遺存状態が良好な資料を選び、収蔵機関に赴いて実測と写真撮影を行う。これらの基礎作業を通じ、大刀の新たな分類と編年を構築する。

つぎに、装飾付大刀の編年をふまえた時期別の分布図を作成し、特定の大刀が集中するなど、特徴的な分布を示す地域を選択する。つぎに、各地域の古墳の墳形、石室構造、副葬品等を検討し、畿内の有力な古墳につながる要素を抽出する。さらに文献史学の研究成果を参照し、大刀の分布と氏族の分布を比較する。すでに双龍環頭大刀は蘇我氏、頭椎大刀は物部氏によって生産・配布されることを主張した。いっぽう、7世紀後半の方頭大刀は飛鳥の官営工房で生産され、東日本に集中的に配布されることを論じた。現時点では、6～7世紀前半には有力豪族や皇族による個別の武器生産があり、それらが淘汰され、7世紀後半に国家による直接的な武器生産に至るといった展望をもっているが、他の装飾付大刀の分析をふまえてそれを論証する。こうして武器の生産と流通から日本の国家形成を考察する。

4. 研究成果

本研究では、圭頭大刀、円頭大刀の分類と編年に取り組んだ。圭頭大刀については、これまでに多くの自治体や博物館において実物資料の実測と写真撮影を行った。その結果、圭頭大刀は8型式に分類でき、3段階に編年できることが明らかになった。また、編年を踏まえて時期別分布図を作成した。初期の資料は韓国南部から北部九州、山陰を経て畿内に流入し、東海から関東地方、さらに東北南部まで流通することが明らかになった。また、中期段階の資料は流通経路に大きな変化はないが、各地域における出土量が増加し、分布が濃密になる。さらに、後期段階の資料は四国北部や山陽地域にも分布するようになり、新たな流通経路が開拓されることが判明した。

初期の圭頭大刀は百済にも分布し、系譜は百済の武器に求められる。また、圭頭大刀の意匠の細部に着目すると、法隆寺に伝世する仏教美術品との共通点が窺える。ゆえに、圭頭大刀の生産主体として厩戸皇子を中心とする上宮王家が想定できる。圭頭大刀の分布からは上宮王家による地方支配の進展を読み取ることができる。今後は、上宮王家の部民である壬生部の分布や、法隆寺式軒丸瓦の分布と比較検討する必要がある。以上の内容については雑誌論文（豊島直博2023「圭頭大刀の生産と流通」『考古学雑誌』第105巻第2号）に発表したほか、研究成果報告書にとりまとめた（豊島直博2024『装飾付大刀の生産と流通に関する研究（ ）』）。

いっぽう、円頭大刀については宮崎県立西都原考古博物館、豊橋市埋蔵文化財センターなどに

において実物資料の実測と写真撮影を行った。現時点では、 把頭に頂部帯をもつ段階、 把頭を二枚合わせに作る段階に大別でき、さらに装飾方法によって5段階に編年できると考えている。また、分布域は圭頭大刀よりも狭いという感触を得ている。円頭大刀については今後も資料調査を継続し、生産主体の特定を目指す予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 豊島直博	4. 巻 105-2
2. 論文標題 圭頭大刀の生産と流通	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 考古学雑誌	6. 最初と最後の頁 1-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 豊島直博	4. 巻 -
2. 論文標題 圭頭大刀の生産主体について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 古墳文化基礎論集	6. 最初と最後の頁 229 - 232
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 豊島直博	4. 発行年 2022年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 234
3. 書名 古代刀剣と国家形成	

1. 著者名 豊島直博	4. 発行年 2024年
2. 出版社 奈良大学文学部	5. 総ページ数 64
3. 書名 装飾付大刀の生産と流通に関する研究（ ）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------